

<会員の広場>



生きる・生きたい・生きられる現代
——様々な生活体験から学ぶ人生——

茨城県生涯学習・社会教育研究会評議員
岡田 貴子

1. 私の育った家庭と子ども時代

私は、2013年3月末をもって大学・学園を退職しました。規定による退職です。私の年代で、しかも女性で、結婚し、出産し、最後まで働き続けるということは非常に稀でした。私の母親は女性教師として、やはり定年まで勤務しました。どんなにはたで見てつらいだろう、悔しいだろう、と思えることも努力で乗り越え、子どもたちの笑顔を糧に常に前向きに自分の責任に取り組んでいました。振り返ると、私がここまで来ることができたのには、そんな母の存在があつてこそと、今になって深く感じています。また、子育てにおいても、子どもたちのやる気を引き出し、彼らが持っているものを大事にし、興味のあることに取り組むことをも大事にしてくれました。もしかしたら、我が家の子どもたちは、少々おませだったかもしれません。弱者をいたわり守り、協力することも教えられました。

翻って、自分の子ども時代を思い返してみると、一人っ子で、外遊びが好きで、動物と一緒に育ち、林に入りカブトムシ、クワガタをとり、小川でオタマジャクシを一杯とってきては困らせる、という日々だったと記憶しています。柿の木から下の池に落ちたこともあります。かくれんぼをしていてうまく隠れたものの、いつまでたっても見つけれられずだんだん怖くなったことなど、思い返すと本当にたくさんの思い出が蘇ってきます。ガキ大将の役割、仲間の大事さ、思いやることのやさしさ等々、本当にたくさんのことを子ども時代に体験することができました。それでも引込み思案だった自分を変えようと、シェイクスピアを原語で演ずる役に挑戦したりしました。しかしながら、仕事となると大変難しい所が多々あったことも事実です。

2. 子供会のお世話

我が家の子ども達も積極的に子ども会活動に取り組みました。私は仕事を理由にPTAも含め母親にお任せでした。しかし、ついに子ども会の役員を半ば強制的に引き受けさせら

れました。しかも、地域を超えて「市子連」の係りとして、でした。そのうち PTA 役員を小・中・高と続けることになりました。ところがそれが意外と楽しい体験なのでした。

今思い返しても何ともはやというほど忙しく、そして充実していた時だったと思い返します。そして、自分の時間のほんの一部であっても、子ども達がお世話になっていた学校や地域の活動のために使うことができ、たくさんの友人に恵まれ、たくさんの活動や体験ができたことを心から感謝しています。

今や、子ども会は縮小の一途です。PTA の役員も引き受け手がなかなかいません。自治会の加入も減少です。一体、相互に助け合い、困っている人には手を差し伸べ、お互い様と言っていた日々はどこに行ってしまったのでしょうか。そして私はいまだ子ども会の役員を務めています。

3. 私立学校を地域に作る苦勞から学ぶ

長い勤務を終えるにあたり、私に与えられた責任は、私が勤務していた学園の草創期を、語られている歴史を見直し、報告することでした。

皆様もご存知の通り、学園史と言えるものは、何十年記念等で編集・発刊されているものです。それを一介の私が見直し、報告する、などということが果たしてできるものなのでしょうか。畏れ多いことと、一瞬私に対するいじめではないか、などと思ってしまったのも事実です。しかし、そこは子ども時代から培った何事も努力すれば解決策が与えられるという心に立ち返り、信じて取り組みました。幸い英語が大好きで英文を読み書き訳すことが嫌いではありませんでした。私が勤務していた「茨城キリスト教学園」はアメリカの「キリストの教会」という宗派が中心となって設立されました。アメリカ中西部中心に、かなり厳しい規律の宗派でした。無楽器で、ダンス、ミニスカート、赤い色、等は禁止でした。他のミッション・スクールと同様第二次世界大戦後に設立されました。ですから、GHQ の影響はもろに受けていたと言えます。現在の場所を選びその運営方針を決めるにも、日本とアメリカの宗教家たちとのやり取りは勿論、アメリカ国内での激しい議論があったことが読み取れます。そしてやはり強いものの前では、どのように心情的に日本の現状を思い、語っても理解を得られず、去って行った宣教師たちが多くいたのも事実でした。

学園の草創期の歴史をまとめるにあたり、GHQ の文書 (英文) を熟読する機会がありました。ご存知のように、その中には、社会教育の基になるものも記されています。博物館、公民館、社会教育施設などもその一部です。戦前から茨城の地で宣教に関わっていた中にフォックスという人物がいました。彼は戦後 GHQ の通訳として日本に戻り、広島などで

の通訳を務めたとされています。その心中は複雑であったと想像がつかます。その後彼らの多くは日本に戻り、学校の設立や宣教に携わっていきます。それにかかわった中にはフォックスをはじめビクスラー、プラウト、ジョリフ等は勿論、アメリカ国内にも心ある人々が多数おられた、と理解しています。そして、学園の設立へとつながって行きました。このようにして、学園の草創期を取りまとめることができ、無事に退職することができました。

4. 現代の子どもたちの置かれた状況

私自身は戦前を知りません。そうではあっても、前述したように子ども時代を子どもとして存分に体験することができました。また歴史書をまとめることから、当時の状況を少しでも理解できたと考えています。

果たして、現代はどのような状況にあるのでしょうか？今年7月までは社会教育委員として、学校・家庭・地域を課題に取り上げ調査・研究・討議を経て「建議」・「提言」・「意見書」・「報告」などを教育委員会に提出してまいりました。昨年は、茨城県の実施する「茨城県社会教育委員研修会」、また「関東甲信越静社会教育研究大会」での発表など様々な活動の機会を与えられ、それらも含めた長い間の働きに対して、10月大分県における社会教育研究全国大会において表彰される栄誉に浴しました。社会教育委員としてまた現在も継続している子ども会役員として、取り組んだ結果、子ども達の置かれた状況が変わっていることが私たちの心を痛めました。

体験は、理解力・想像力・生きる力・他者への思いやり・優しさ・共に生きる・協力し協調する力など人生の様々な場面で出会う事柄を解決し、前に進むことができる人になるうえで、大変重要な意味を持つと考えています。それらがなぜできなくなり、簡単に他人を傷つけ殺めるようになったのか、どうして自然や動物に優しくなくなったのか、けがをしたり、させられたりしたことがないまま育ち、痛みが分からない、加減が分からない、そして取り戻しが見つからないところまで行ってしまうまでになってしまったのでしょうか。一つには、社会教育施設として、子ども達が自由に集い、活動できる場所が確保されていないと言うことがあるのではないのでしょうか。また、親として安心して子ども達を自由に遊ばせることができない世の中になってしまっていることもあげられます。

以下は、家庭・学校・地域の教育力とはどういうものかというのを考えてみたいと思います。

(1) 家庭

育ちから学ぶ場所。親や祖父母、兄弟姉妹、親戚などからしつけを学ぶところと言えます。子どもとして自由に外遊びや友達と過ごす時間が保障される場所です。たとえば、盗んではいけない、殺してはいけない、人を尊重する、人にはそれぞれ生きる権利があることなどをおしえられる場所です。動物や植物もそうであることなども習得します。基本を学ぶところです。親が悪い、という見方もあります。しかし、親が十分な体験活動教育を受けたかという決してそうではない事実もあります。野球のできない親がたくさんおられます。私のように働く女性が増え、その忙しさから十分に子ども達と対峙できないという状況もあります。男女協働社会の実現ができたのかどうかいかがでしょうか？

(2) 学校

生きる上で必要な、読み・書き・そろばんを学ぶ場所です。学びたい目標を決め、専門的な分野を極めて行くところでしょう。将来の職業・生きる道につながる教育を受けるところです。自ら課題を見つけ解決していく力が付くところです。多くの友人を得、将来にわたって支援したりされたりする友達となっていくでしょう。また、尊敬できる先生、親身になってくれる先生との出会いの場でもあります。人間形成の場と言えるでしょう。

(3) 地域

人と人とのつながり、立場の違い、相手を理解する、尊重する、思いやることを学ぶ異年齢の世界です。国によって習慣・考え方・物の見方・生き方などに違いがあることを学ぶ場でもあります。多くの人々と遊び、体験を通して弱者をいたわり協力することを習得するところです。人間だけでなく、物言えぬ動物・植物、自然など、様々な生き物が地上には存在することを理解できる場です。

それぞれの体験に無意味なものはないはずで、その体験が良い結果を生むものであってほしいと、心から願うものです。

5. 地域とかかわって

私の勤務していた大学の地域連携を担当していた期間、様々な生涯学習、地域活性化、商店街支援、限界集落等に関わる事業に携わる機会を与えられました。大学ですから若い学生たちが多数いるはずですが。私は「地域連携支援隊」という学生組織を立ち上げました。なかなか参加してくれる学生はいませんでした。参加している学生たちの姿を見てその数は徐々に増えていきました。その際、始めはおずおずとしていた学生たちが様々な体験—行政の会議への出席、活動への参加、地域の人々とともに歩き・学び、そして会議で発表し、提言をする—を通してぐんぐんと積極的になり、自分に対する自信を深めていく姿

を目の当たりにすることができました。ここでも体験の重要性が証明されたものと考えます。

おのおのの分野でそれぞれの役割をはたしていければ、地球を母国とする人間は、協力し強調し、助け合い、不足分を補いあい、しかしながら各自が最善を尽くして生きていく事ができるはずだと信じています。人は一人では生きていけない存在です。生を受けたものには、生きていく権利があるのです。社会福祉・健康保険・給料・年金、どれが欠けても問題です。これからの世界を背負っていく青少年たちが安心して、課題に取り組み、解決し、歩んでいける世の中にすることが私たちの責務の一つでしょうか。

どうも地球が悲鳴を上げているような気がしてなりません。理論だけで、人は動きません。心を動かしません。現代はそんな時代なのだと、そう思えてならないのです。私たちに課されたものは何なののでしょうか？真剣に問う必要があるのではないのでしょうか？

私自身は、茨城県生涯学習・社会教育研究会評議員として11月に開かれる関東地区研究大会をはじめとする活動、ひとまちネットワークの子ども大学企画運営、放課後子ども教室企画運営委員等としての活動を通し、研究や支援をこれからも続けていくつもりです。

岡田 貴子 (おかだ たかこ)

元茨城キリスト教大学地域連携推進室課長等・茨城キリスト教学園資料センター課長。現在、茨城県生涯学習・社会教育研究会評議員、茨城県水戸生涯学習センター運営協議会副議長、NPO 法人ひとまち・ネットワーク支援、水戸市青少年育成推進会議、水戸市青少年相談員、笠原学区子ども会育成会会長、放課後子ども教室運営委員など活動中、全日本大学開放推進機構会員。